特49
856

唱歌教科書 卷四

教師用

共益商社編

共益商社樂器店藏版

緒言

弊社晨に善良なる唱歌教科書の編纂を希圖するや、先づ在京知名の音樂及文學の數大家に乞ひて、該書編纂上の審査監督の事を依囑し、同時に廣く書を全國各地なる專門の諸先生に致して、諸地方に於ける該科普及上の狀況を始め、一般生徒の嗜好、歌曲難易の程度、旋法の種類、音域、歌曲の品題、分量、及び其排列の順序、教授の方法、其他編纂上要用なる條目に付て、委細の經驗注意等を寄せられん事を乞ひ、之を統計して、先づ編纂上大體の順序方法を定め、品題を選み、以て文學の大家に之が作歌を依賴し、再び之を各地の諸先生に配布して其作曲を仰ぎ、集まれるもの數百曲の中に就て、更らに前記編纂監督の任に當られたる諸大家の、最も懇切丁寧なる審議取捨を經、茲

に着手以來幾多の歳月を閲して漸く此の編は成りたり、されば本書は、其編纂上最も精密の手續きを履みて生れたるものなる事を信ずるものにして、こゝに其歴史を序すると同時に、謹んで之に干られたる諸大家に向って、深く其好意を陳謝すと云爾。

明治三十五年四月

本書の特色及び使用上の注意

程度　○本書は主として高等小學四學年間の課程に適應せしむる目的を以て編みたるものなり、

（されば、本書の第三卷第四卷及び其他の幾分は、また中學校及び高等女學校にも適用するを得るものとす、）

歌曲排列順　○本書に於ける歌曲排列の順序は、斯道の諸大家の最も精密なる審査を經て成れるものにして、系統正しく漸次簡より繁、易より難に進めるは勿論、遲き曲と早き曲、並に勇ましきものと優しきものとの配合、音域の廣さ、題目並に歌想曲想の程度、季節の順序、及び各學期間に教授すべき歌曲の數等、凡て最も適切なるべき樣編まれたるものなり、（なほ曲を追うて、樂譜上新記號の現はるゝ毎に、他の注意すべき諸項目と共に、必ず之を「演奏注意」欄内に記述したり、されば特別の事情ある場合に非れば、妄りに之を取

捨變換する事なく、たゞ全々所載の順序のまゝ、教授を進行すれば足るものとす、

但し祝日大祭日等の唱歌は、本篇以外別に練習を要すべきものなれば、之を行ふべき學期間の曲數は、豫め其割合を以て排列しあるものと知るべし、なほ毎曲必ず充分生徒の熟練するを待って後、次の歌曲に移るべく、又常時既習曲を復習すべき事は論を俟たず、

高尚なる歌曲

○三四年生用の歌曲中には、在來の唱歌集の程度に比して、頗る高尚なるもの無しとせず、されども、もと本篇の歌曲は、悉皆これ本邦人の作にして、特に最も我兒童に適切なるものをのみ、選み集めたるものなれば、彼の外人の作の我國情に叶はざるものゝ類を含まず、されば、一二年生より本教科書の順序により、正當の練習を積みたるものは、自然これら高尚なる歌曲をも見事に唱謠し得て、よく其趣味を會得し得るに至るべきを信ず、彼の常時徒らに兒童の容易く擬唱し得らるゝものをのみ、多々注入するが如きは、斯の科の教授上、善良の結果を擧ぐべき所以に非ず、

但し樂曲教授には、必ず樂譜を用ゐ、視覺上の智識をも應用せしめて、意識的練習を爲さしむべき事勿論なり、

〔附記〕本書編纂に當り、一般地方の專門家より聽くを得たる意見の大多數は、一二年生には略譜、三四年生には本譜を用ゐしむるを以て、適當となせり、

調子

○本篇に於ける樂曲は、其自然の性質と、兒童の音域とを考へ、夫れ〳〵適當の調子を以て記載しあるものなれば、妄りに移調變換する無からん事を望む、

但し曲により、一音内外の區域に移し得べきものは、演奏注意欄内に之を附記したり、

曲の想

○歌章に意義あるが如く、樂曲にも亦各其想あるものにして、勇ましきあり、優しきあり、廣大なるあり、輕快なるあり、其樣一ならず、蓋しこの想こそ、唱歌上最も緊要なる條件にして、これ無ければ樂曲は全く死物と成

り了るべし、本書は毎曲首に必ずこの曲想を附記し、なほ曲によりては、「演奏注意」欄内に於て更らに之を説明したれば、先づこれに依りて曲趣を悟り、其の心を以て唱歌せば、幾庶くは漸次美的興味を會得するに至らん、なほ特に強弱記號及び發想記號を附記したる曲にありては、充分之に留意して、善く其曲の眞趣味を發輝せん事を望む、

但し先づ調子及び拍子に熟達して後、強弱及び發想の練習に及ぶを、正當の順序とす、玆に本書に使用したる記號の一般を説明すべし、

pp……最も弱く
p……弱く
mp……稍弱く
mf……稍強く
f……強く
ff……最も強く
<……漸々強く
>……漸々弱く
rit……漸々遲く

速度

○樂曲の速度は、また曲想と大關係あるものなれば、其緩或は急に失する事無からん爲め、毎曲必ず拍節機（メトロノーム）の度數（♩=百八）を附記して、其速度を明示し、なほ一曲中に特別の緩急あるものは、「演奏注意」欄内に於て、更らに之を述べたり、

拍節機（メトロノーム）

但し新に教授せんとする樂曲は、豫め拍節機に依りて、其拍子の速度を計り試み、よく其曲趣を會得し置くを善しとす、又若し教授に際して拍節機を使用する事あるも、曲首三四小節間にのみ之を用ゐれば足れり、一歌曲を通じて拍節機と共に唱歌するが如きは、機械的に流れて却て曲想を失ふの憂あるべし、

〔附言〕從來唱歌教授の通弊として、樂曲の速度多くは緩に失するの傾あるに如たり、

發聲法

○聲音は唱歌上唯一の材料にして、發聲法の善惡は直ちに歌曲の美醜に關す、されば教師は常時兒童の發聲に注意し、能ふべきだけ善美なる聲音を使用せしむる事を怠るべからず、吸息法も亦唱歌上重要なる一條件にして、こはまた呼吸機の發育に關する事大なり、本篇樂譜の上部に記したる、V記

號は卽ち吸息の箇所を示したるものなり、

〔附言從來該科の敎授には、暴聲を用ゐて絶叫するをのみ活潑なる唱歌法と誤解するの弊あるが如し、くれ〴〵もこの項に注意あらん事を望む、

敎授上說明の要

○歌詞の意味に付ては、每歌章の末に大要之を解釋したるが、敎師は先づ歌曲の題目、歌意、曲想等により、善く他科との聯絡を考へ、又旣習歌曲との類似点、及び差点等を視、適宜に生徒と問答し、或は善く其意を說明して、充分兒童の興味を喚起し、且つ敎授の聯絡を計らん事を要す、

注意欄

○以上記載以外の條項は、各曲に注意欄を附して、一々其内に之を記述したれば、每曲先づ之を熟讀して後、敎授に從はん事を望む、

女生徒專用曲

○第三卷及び第四卷には、卷末に女生徒專用曲を添へたれば、適宜に之を學期間に配當して敎授すべし、

唱歌敎科書卷四

敎師用

目次

第一學期

一 花見……二頁
二 仁德天皇……四頁
三 我陸軍……六頁
四 京都……八頁
五 ワシントン……一〇頁

第二學期

一 富士山……一四頁
二 田舍の夕ぐれ……一六頁
三 朝日の旗……一八頁
四 靖國神社……二〇頁
五 日本武尊……二二頁
六 歲暮……二六頁

第三學期

一 樂しき我家……二八頁
二 日本海軍……三二頁
三 御眞影……三六頁
四 名は萬代……三八頁

女生徒專用

一 花鳥……四二頁
一 赤十字……四六頁
一 亡き友……四八頁
二 水鳥……五〇頁

花見

(一)

あさ日にほへる、　花のみ山、
つどへるまゆらを、　そこにこゝに、
うたひてあそべり、　花のこかげ、
うるはしや花、　うるはし花、

(二)

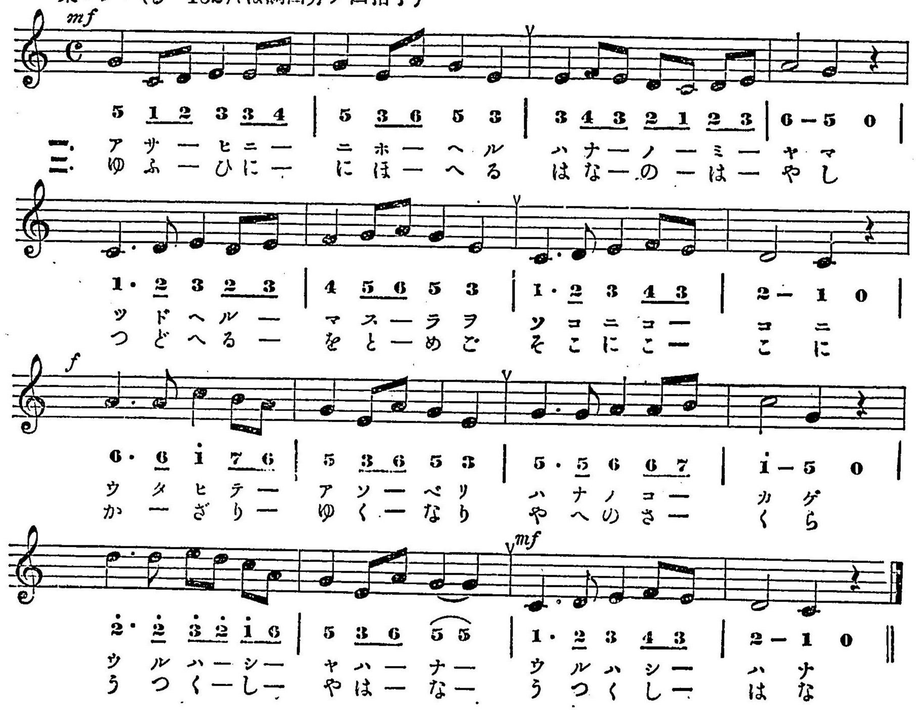
夕日にほへる、　花の林、
つどへるをとめご、　そこにこゝに、
かざり行くなり、　八重のさくら、
うつくしや花、　うつくし花、

演奏注意

○豫習曲として前々學年に出だせる「農夫」を復習すべし
○各段末節の二分音符と四分音符との間はスラーあるが如く滑かに歌ふべし

花見

樂シゲニ(♩=132)(は調四分ノ四拍子)



仁德天皇

(一)

玉の宮居は、名のみにて、
あれにぞあれし、大殿に、
三歳の月日、淩ぎつゝ、
民のかまどを、にぎはし給ふ、
その大御めぐみ。

(二)

雨ふりしきる、あしたにも、
風ふきすさぶ、夕にも、
大御身の上は、忘られて、
民のうへのみ、思ほし給ふ、
その大御心。

この歌は、かしこくも、仁德天皇の、民を愛し給ふ大御心のありがたさをたゝへ奉ったのである。

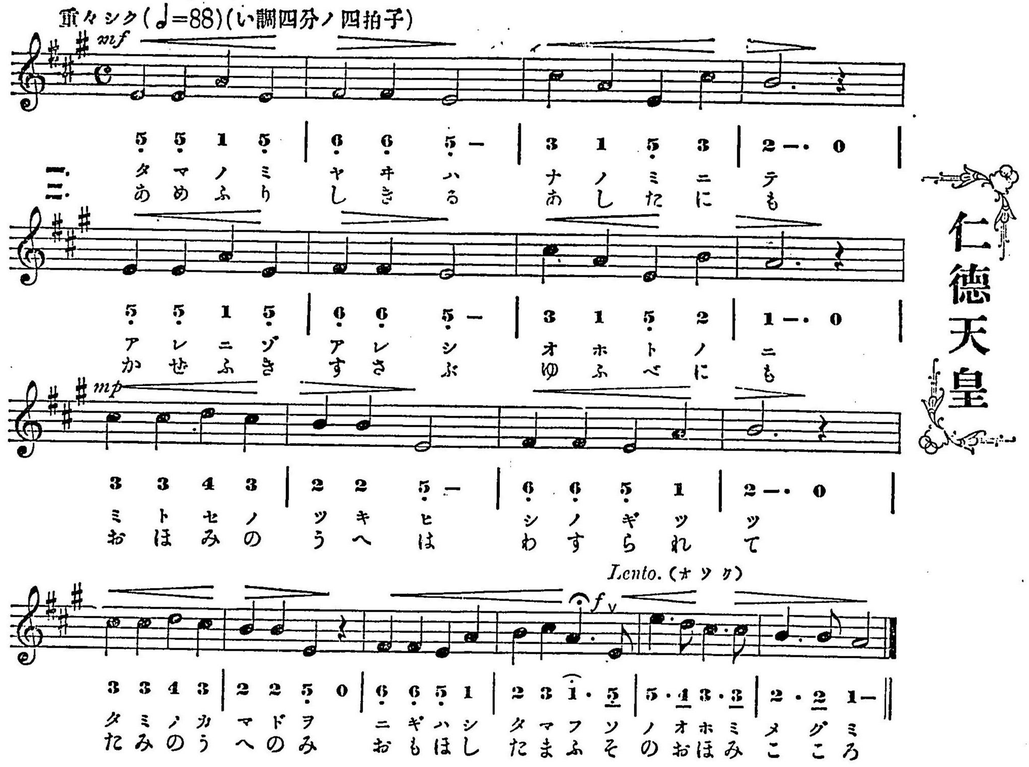
玉の宮居は名のみにて　玉のよーな御殿とは言ふばかりで實はあれはてゝある。

淩ぎつゝ　御こらへなさる。

風ふきすさぶ　風が吹きあれる。

演奏注意

第四段第四節は稍緩めて、又最後の二小節は前より凡倍遲く歌ふべし



我陸軍

(一)

あやに畏き、わがすめらぎの、
歩騎御國をまもる、つはもの雄々し、
心は砲工の、分ちはあれど、
一つ、君のため。

(二)

手むかふ敵を、騎兵の槍と、
歩兵の銃もて、打ち拂ふべし、
敵壘くづすは、工兵の鍬、
敵營くだくは、砲兵の彈丸。

(三)

敵を千里に、おひしりぞけて、
凱歌奏する、喇叭の響、
きくも勇まし、わが陸軍の、
萬歳となへて、うたへや友。

我が陸軍には、騎兵、歩兵、砲兵、工兵、輜重兵などの種類があつて、各、その務めを守り、君のため國のために命をさゝげて盡すさまを詠んだのである。

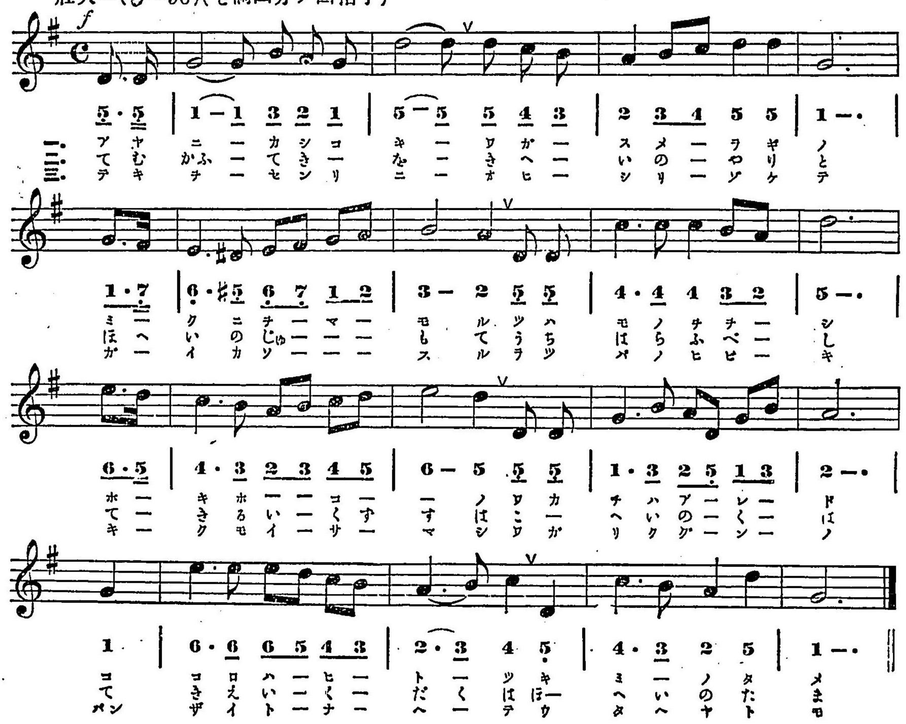
あやにかしこきはめて尊い。
すめらぎ天皇陛下。
敵壘敵のとりで。
敵營敵の陣屋。
凱歌戰にかちたるときの歌。

演奏注意

○豫習曲として前學年に出でたる「朝風」を復習すべし
○第二段第一小節なる♯5・音の高度の下らざる樣注意すべし
○第二章の歌詞中「歩兵」と「砲兵」との混せざる樣注意あるべし

我陸軍

壯大ニ(♩=96)(ト調四分ノ四拍子)



京都

(一)

櫻に名を得し、嵐高山、
紅葉に知らるゝ、尾山、
春秋盡きせぬ、風景に、
富みたる處ぞ、西京は。

(二)

千歳のいにしへ、桓武帝、
都を定め、ましゝより、
榮えし内裏の、面影を、
今なほ仰ぐも、かしこしや。

(三)

宮にも寺にも、歴史ある、
この地を忘るな、我が友よ、
東洋無双の、公園と、
いはるゝ名所ぞ、西京は。

京都は山紫水明というて、風景の佳いうへに、桓武天皇以來千年餘りの都の地であるから、昔の御所をはじめ、名勝古跡が數へられぬほど有って、東洋にならびなき大公園のよーであるといふこと。

名を得し　ひよーばんの高いこと。

知らるゝ　世に知られたることで、やはりひよーばんの高いこと。

定ましゝ　より定めなされましてから。

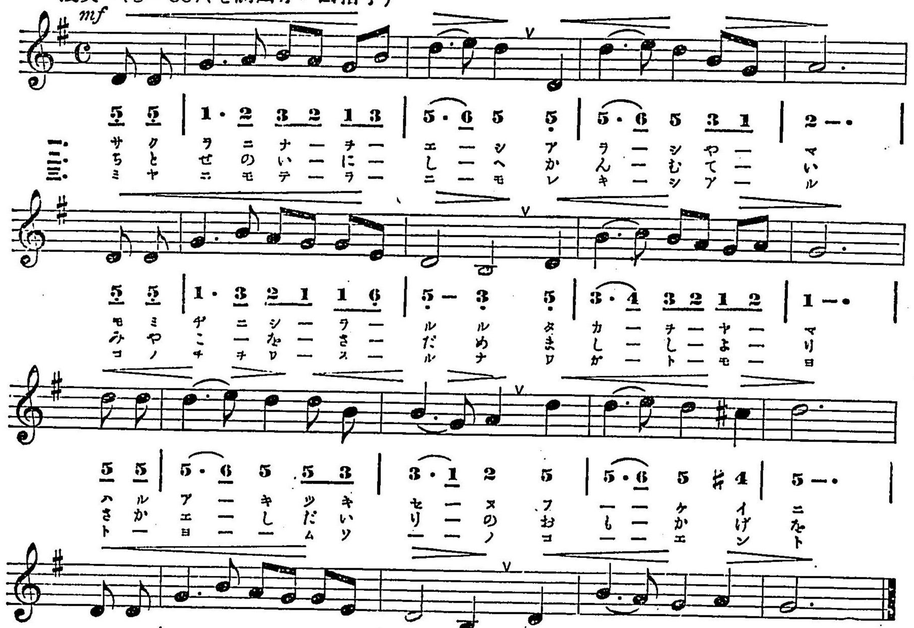
内裏　大内と申して、天皇陛下の入らせられる御殿。

演奏注意

○第一段第二段及び第四段の各第二小節より第三小節へは凹滑に移るべし

京都

優美ニ(♩=88)(ト調四分ノ四拍子)



ワシントン

天はゆるさじ、
良民の、
自由をなみする、
虐政を、
十三州の、
血はほとばしり、
こゝにたちたる、
ワシントン。
ロッキーおろし、
吹荒れて、
ハドソン灣に、
浪さわぎ、
劍戟ひゞき、
軍馬嘶く、
すは戰の、
鬨の聲。
勝利を告ぐる、
喇叭の音、
「邦の父」ぞと、
仰がれて、
ミシガン湖上、
秋月高く、
輝く君が、
そのいさを。

これは、ワシントンが、合衆國獨立戰爭の大將となって、みごと戰爭に勝ち、其國を立派に獨立せしめたいさをしをほめたのである。

天はゆるさじ云々　良民とはよき人民、なみするとは無いものふ政事のことである。虐政とは人民をむごくとりあつかふといふわるい政事は、たとへ人がゆるしても天は許すまいといふこと。故に二句の意は、よき人民の自由をうば

十三州の血は云々　合衆國全體が戰爭にふるひ起ってワシントンを大將にしたといふこと。

ロッキーおろし　ロッキー山から吹きおろす風。

劍戟つるぎや、ほこ。

嘶く　馬の鳴くこと。

秋月高く云々　秋の月のよーに高く明かに、ワシントンのいさをがかゞやいてをる。

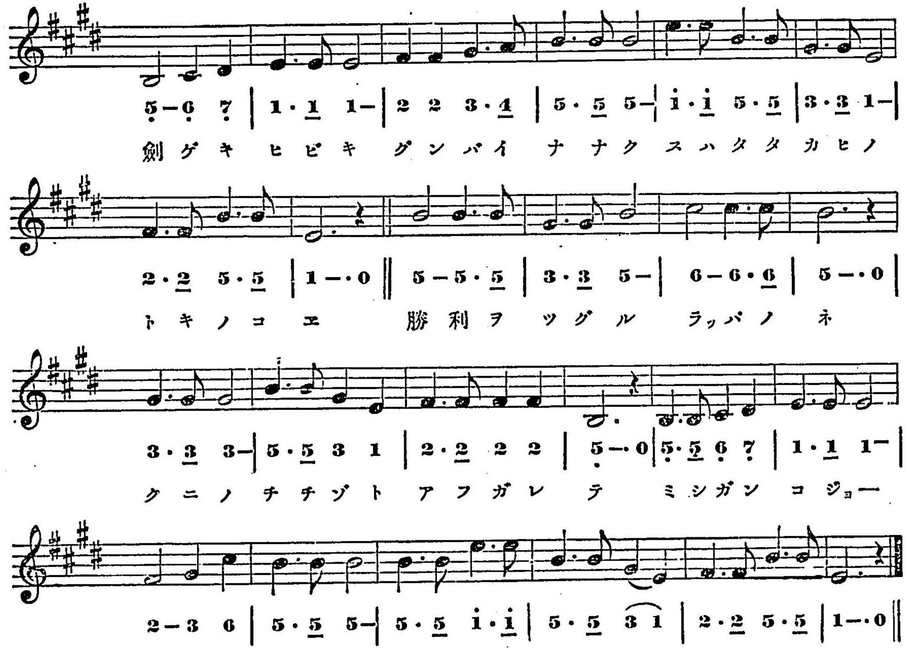
演奏注意

○特に拍節機の度數に注意し各小節の强聲部に力を入れて歌ふべし但し決して叫唱の弊に陷るべからず

○當曲は(に)調に移す事を得

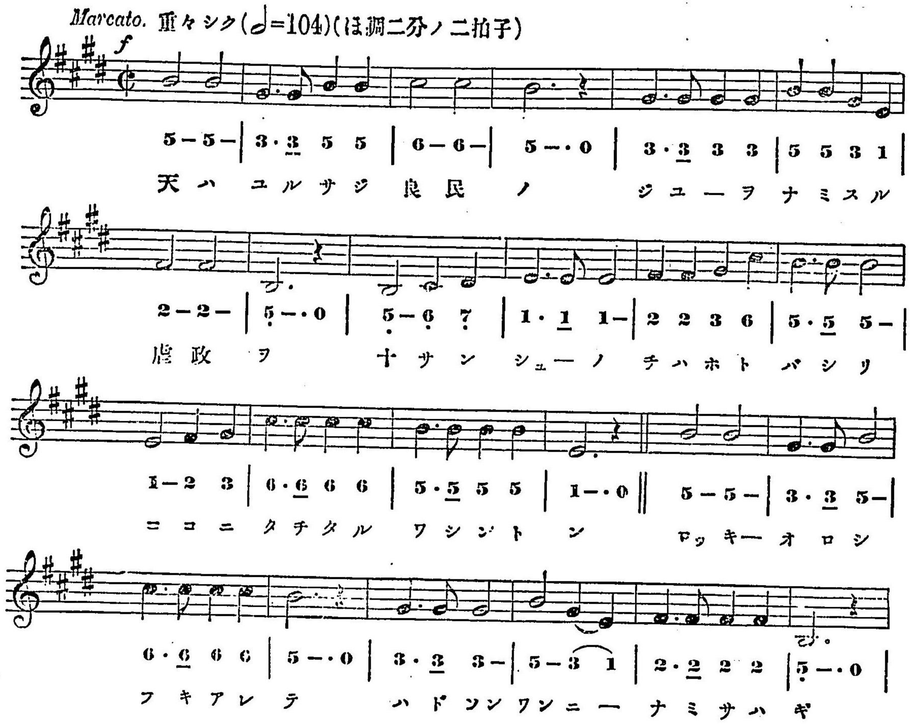
ワシントン

（十二ページのつゞき）



ワシントン

（十二ページのつゞき）



富士山

(一)

あふげよや、ふじのやま、
やま〳〵の、あるなかに、
おほ空の、雲を着て、
けだかきが、そのすがた。

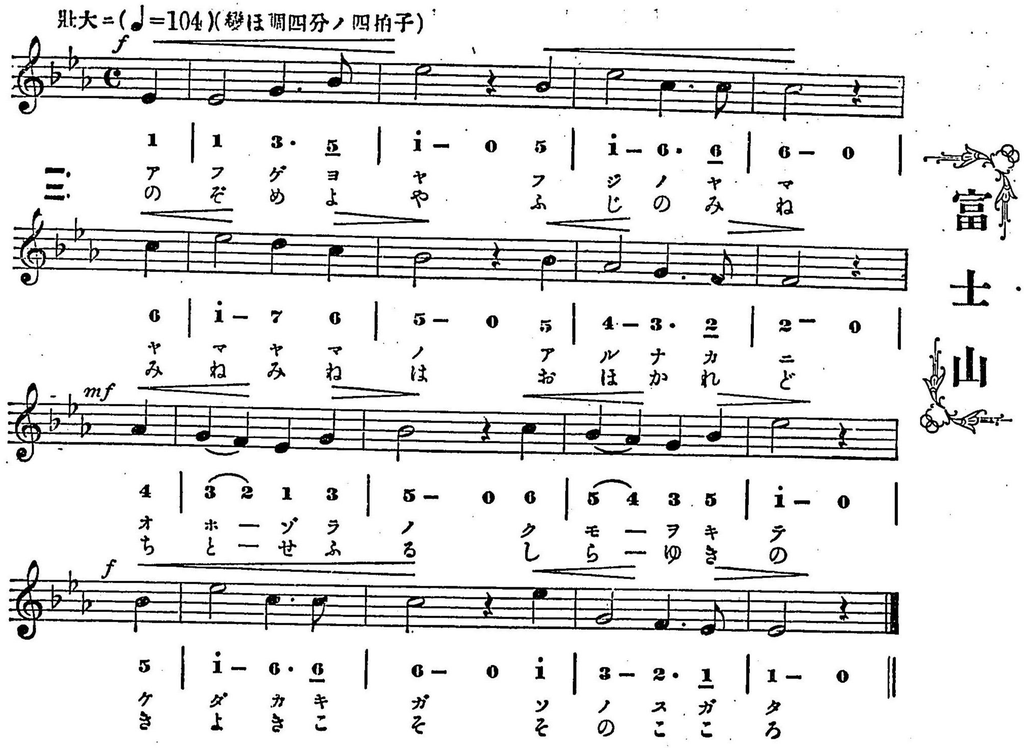
(二)

のぞめよや、富士のみね、
みね〳〵は、おほかれど、
ちとせふる、しら雪の、
きよきこそ、そのこゝろ。

けだかき上品な。

演奏注意

重々しく歌ふべく、然かも緩漫に流るべからず



田舍の夕ぐれ

(一)

鎭守の森の、夕日のひかり、森かげに、消えはてゝ、
ほそくながるゝ、里川の、夕まぐれ。
おともねむたき、

(二)

樂しき家に、賤の男を、
枝のねぐらに、群鳥を、
しづけき小屋に、田の馬を、
送りてひゞく、鐘の聲。

(三)

はや世はすべて、くれはてぬ、
あすの朝日の、出づるまで、
闇の是世を、守るとや、
瞬きそめぬ、空の星。

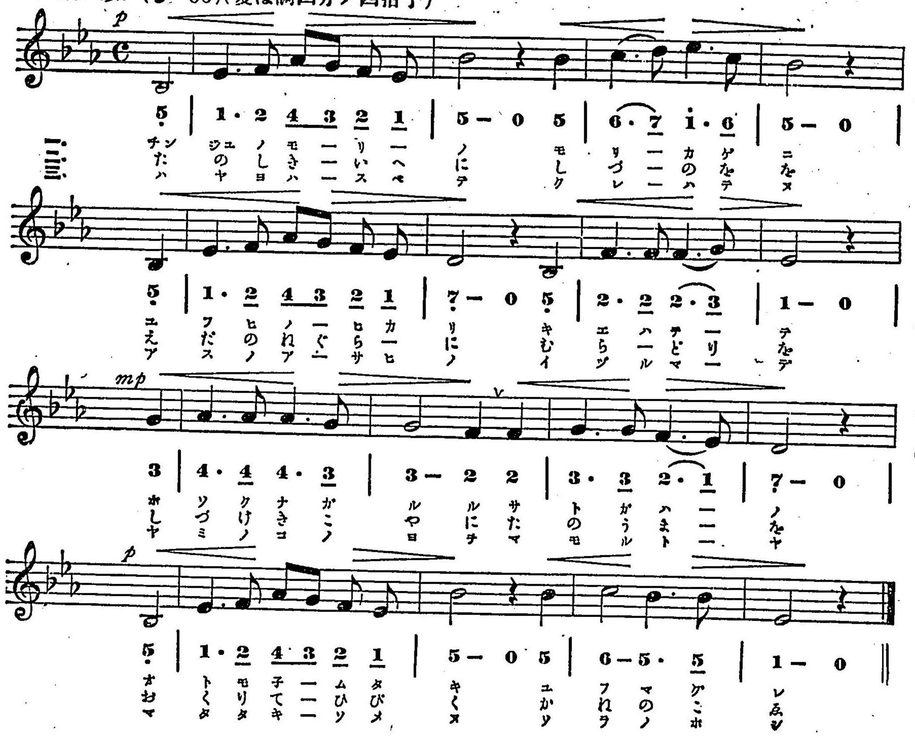
村社の森かげに日かげが消えてしまうて、細い川の流れる音まで眠むたさうな夕がたに、寺の鐘が鳴ると、農夫は家に、馬は小屋に、鳥はねぐらにと、それ〳〵急いで歸る。さて全く暮れてしまふと、明朝まではおれが闇の世界を守らうというて、空の星がきら〳〵光りはじめる。（略解）

演奏注意

○充分發想に注意すべし
○第一段及第四段の各第二小節なる第一音符は滑らかに弱く歌ふを要す
○第二段の第二小節及び第三段の末節なる二分音符（♩）音は其高度下り易し、注意あるべし
○第三段は稍速度を早めて迫るが如く歌ふを可とす
○最後の二小節は速度を緩め且つ微聲に歌ひ納むべし

田舍の夕ぐれ

感ヲ以テ（♩=66）（變ホ調四分ノ四拍子）



朝日の旗

(一)

廣き世界の、津々浦々、
めぐる軍艦の、マストの上、
潮風に、ひらめきて、
國光あぐる、朝日のはた。

(二)

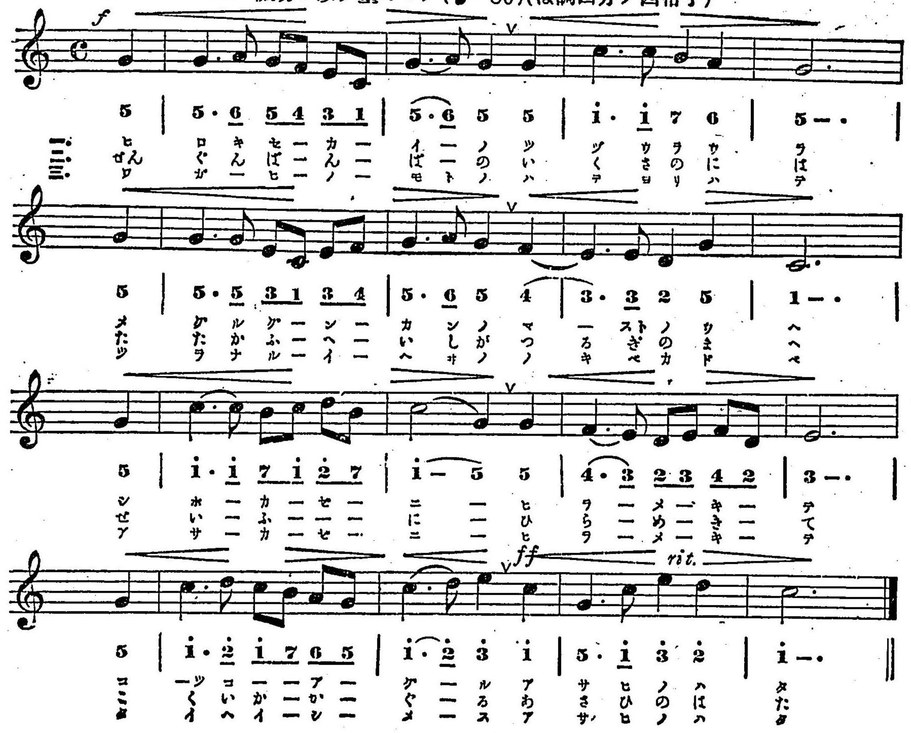
千軍萬馬の、戰の場、
たゝかふ兵士が、つるぎの前、
腥風に、ひらめきて、
國威かゝぐる、朝日のはた。

(三)

わが日本の、果てよりはて、
つらなる家居の、軒べ門べ、
朝風に、ひらめきて、
泰平しめす、朝日のはた。

朝日の旗

Moderato maestoso. 威勢ヲ以テ重々シク(♩=80)(は關四分ノ四拍子)



靖國神社

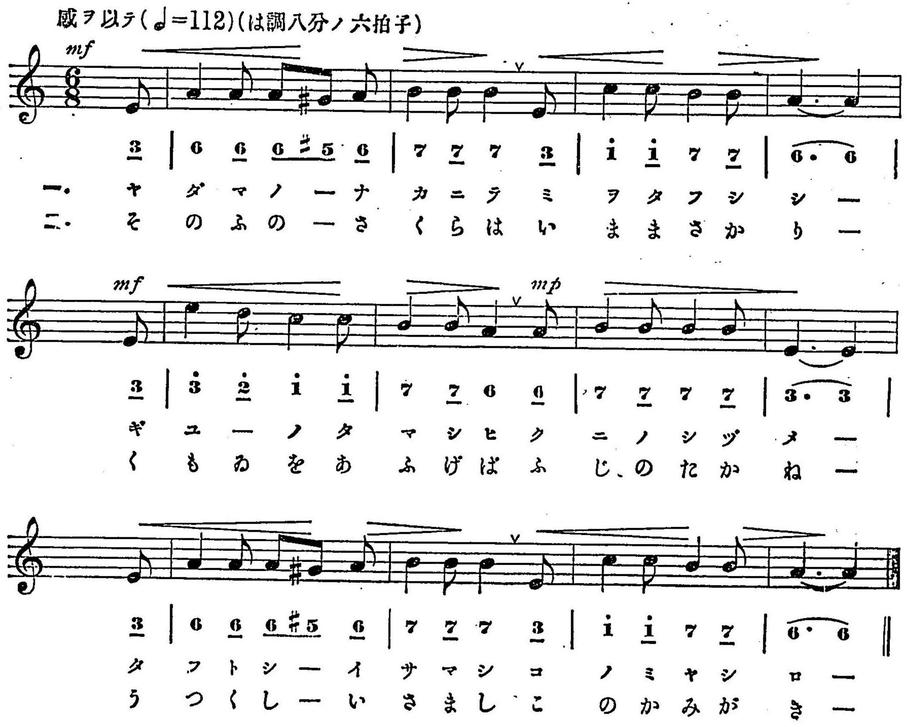
(一)

矢玉の中にて、
身を斃し、
義勇の魂、
國のしづめ、
たふとしいさまし、
このみやしろ。

(二)

園生の櫻は、
いま眞盛、
雲井をあふげば、
富士の高根、
うつくしいさまし、
この神垣。

靖國神社



日本武尊

(一)

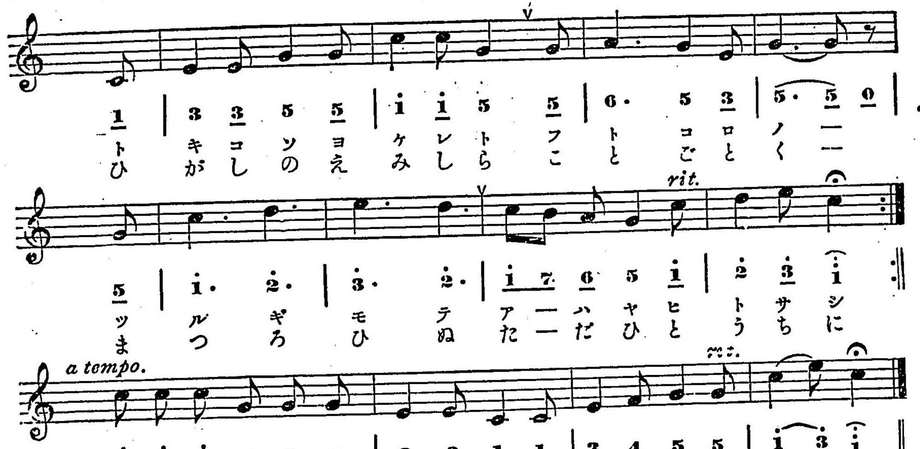
をとめのすがたに、
（少女）
みをやつし、
（身）
まぎれいる、
ぞくのにひむろ、
（賊）
いはひのさかづき、
（祝）
とりぐに、
ふひふせる、
（酔）
くまそたける、
ときこそよけれと、
ふところの、
つるぎもて、
（剣）
あはやひとさし。

(二)

さがむの野なかに、
もゆる火を、
つるぎもて、
なびけかへしつ、
あらなみいかれる、
うみのうへを、
小舟もて、
おしわけわたる、
ひがしのえみしら、
ことぐく、
まつろひぬ、
たゞひとうちに、
うべなうべな、
日本武の御名や。

日本武尊

（二十五ページのつゞき）



1 3 3 5 5 i i 5 5 6· 5 3 5· 5 0
トヒ キガ コシ ソノ ヨエ ケミ レシ トラ フコ トト コゴ ロト ノク

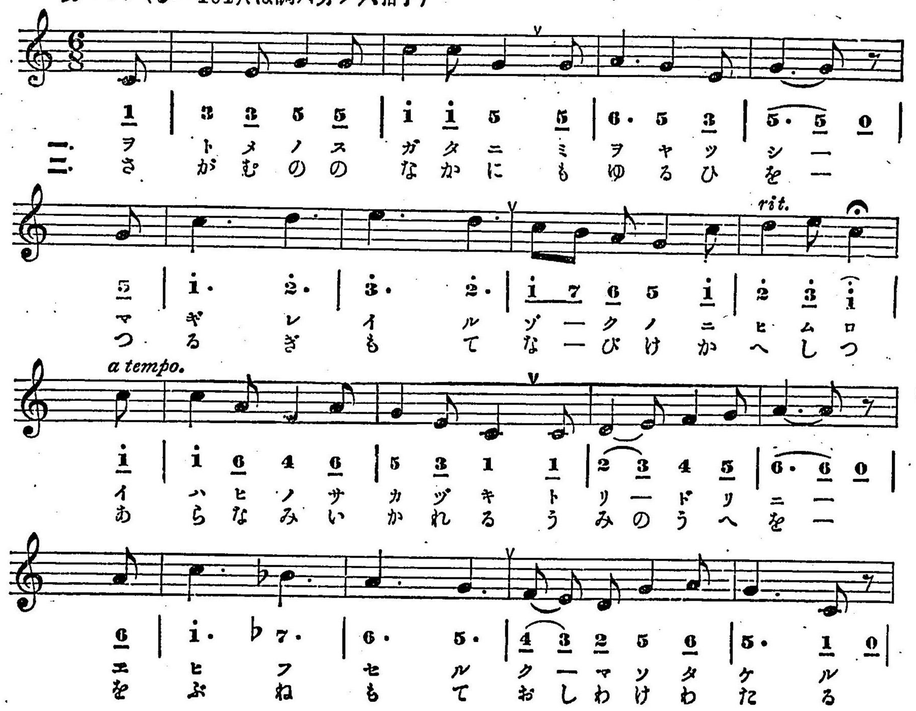
5 i· 2· 3· 2· i 7 6 5 i 2 3 (i
ツマ ルツ ギろ モひ テぬ ア一 ハだ ヤひ ヒと トう サち シに

i i i 5 5 5 3 3 1 1 3 4 5 5 i 3 (i
うべ なう べな やま とだ ける のみ な一 や

勇マシク（♩.=104）（は調八分ノ六拍子）

日本武尊

（二十四ページへつゞく）



1 3 3 5 5 i i 5 5 6· 5 3 5· 5 0
ヲさ トが メむ ノの スの ガな タか ニに ミも ヲゆ ヤる ツひ シを 一一

5 i· 2· 3· 2· i 7 6 5 i 2 3 (i
ママつ ギる レぎ イも ルて ゾな ークび ノけ ニか ヒへ ムし ロっ

i i 6 4 6 5 3 1 1 2 3 4 5 6· 6 0
イあ ハら ヒな ノみ サい カか ヅれ キる トう リみ ノの ドう リへ ニを 一一

6 i· ♭7· 6· 5· 4 3 2 5 6 5· 1 0
ヱを ヒぶ フね セも ルて クお シわ ソけ タわ ケた ルる

歳暮

(一)

矢よりも早く、過ぎ行きし、
今年は何を、なしつるぞ、
花にもみぢに、遊びしも、
昨日か今日の、よーなるに。

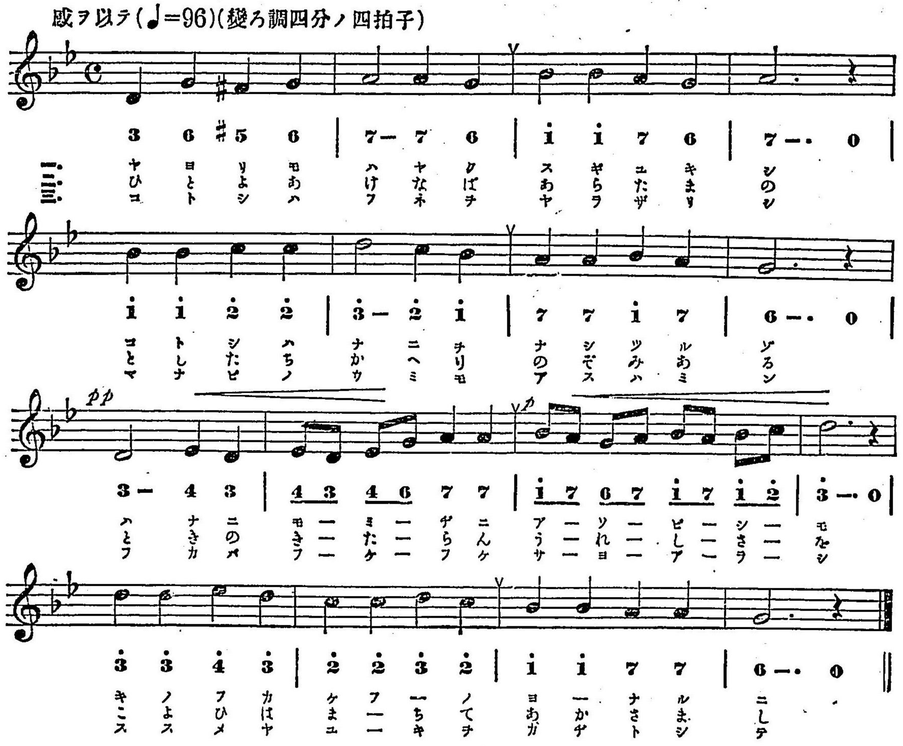
(二)

一夜あけなば、新玉の、
年たちかへり、望みある、
時のきたらん、うれしさを、
こよひは待ちて、あかさまし。

(三)

今年は舟を、やらざりし、
學の海も、明日は見ん、
吹かば吹け〳〵、さよ嵐、
進めや勇氣を、かぢとして。

歳暮



樂しき我家

(一)

花こそ薫られ、
　わがこの園、
月こそ匂はれ、
　わがこの軒。
かすみは常磐に、
　まがきをこめ、
春風のどかに、
　袖にふけり。

(二)

薫れる花には、
　雨風あり、
匂へる月には、
　雲霧あり、
わが此園生と、
　軒端とには、
あらしもふかず、
　雲またなし。

(三)

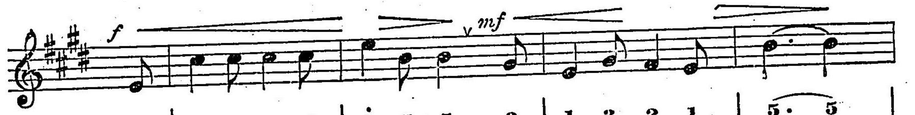
父母はらから、
　おのもおのも、
あくればそれぐ、
　つとめにつき、
くるれば一つに、
　うちつどひて、
たのしくのどけく、
　語らひつゝ。

(四)

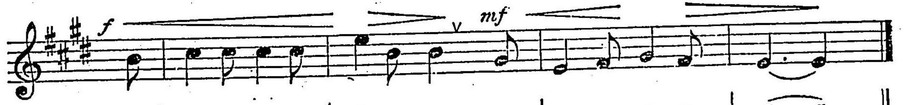
語らふ言に、
　花はにほひ、
へだてぬ心に、
　月こそすめ、
たのしき園生や、
　わがこの園、
のどけき軒端や、
　わがこの軒。

樂しき我家

（三十ページのつゞき）



1 | 6 6 6 6 | i 5 5 3 | 1 3 2 1 | 5· 5 |
カ ス ミ ハ ト そ キ ハ ニ と マ の ウ ガ キ ヲ コ に ヒ そ メ は テ の
わ が こ の バ ヒ そ の ふ ツ ニ や ワ が ば と ド の ― ― ―
ク ル レ し き の ト ふ ツ ふ ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―
た の し き そ ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

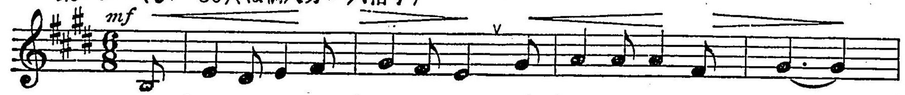


5 | 6 6 6 6 | i 5 5 3 | 1 2 3 2 | 1· 1 ‖
ハ カ ゼ ノ カ ニ ソ ク デ フ ケ リ ―
あ し も ふ ー ず ク も タ た な し ― ― ―
タ シ ク ノ ケ や ワ が ニ ヒ ッ ― ― ―
の け き の ば カ ま の き ― ― ―

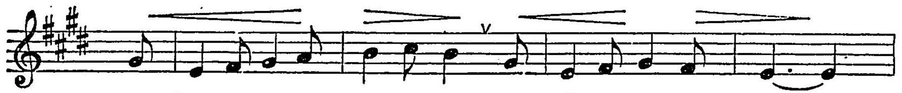
樂しき我家

（三十ページへつゞく）

樂シゲニ（♩.=80）（ほ調八分ノ六拍子）



5 | 1 7 1 2 | 3 2 1 3 | 4 4 4 2 | 3· 3 |
一 ハ ナ コ ソ カ ヲ ラ ネ ワ ガ コ ノ ソ ノ ―
二 か を れ る は な に は あ め か せ あ り ―
三 チ チ ハ ハ ラ カ ラ オ ノ モ オ ノ モ ―
四 か た ら ふ こ と ば に は な は に ほ ひ ―



3 | 1 2 3 4 | 5 6 5 3 | 1 2 3 2 | 1· 1 |
ツ キ コ ソ ニ ホ ハ ネ ワ ガ コ ノ ノ キ ―
に ほ へ る つ き に は く も き り あ り ―
ア ク レ バ ソ レ ゾ ッ ト メ ニ ッ キ ―
へ だ て ぬ こ こ ろ に つ き こ そ す め ―

日本海軍

(一)

山なす巨艦は、
海の城か、
水雷大砲、
そなへきびし、
マストは高く、
雲をしのぎ、
ひらめく日の旗、
見るもをゝし、
怒濤萬里、
縱横自在。

(二)

縱横自在に、
はしる艦を、
縱横自在に、
つかふ伎倆、

(三)

海軍動作は、
愉快々々、
海國男兒の、
これぞつとめ、
戰時は萬里に、
敵をやぶり、
平時は近く、
國をまもる、
重〻し、
海軍任務。

一の歌は、軍艦の壯大なさまで自在に走ることをのべ、二の歌は、かかる軍艦を自由にあつかふ我が海軍の動作を說き、三の歌は、平常と戰時との海軍任務を示したのである。

山なす巨艦は云々　山のよーな大きい船は海の中に浮んで居る城かと思はれる。

怒濤　大波のことを、怒れる波とおもしろく言ひなしたもの。

變幻出沒云々　見えたかと思へば隱れ、隱れたかと思へば又あらはれるといふ手ぎはにいかに手あらいおにがみも泣き、海に住むといふ龍までも姿をかくしてしまふ。

動作　はたらきしわざ。

海國男兒のこれぞつとめ　これぞ海國男兒のつとめといふべきを、言葉の勢をつよめるために、わざと言葉の順序をかへたのである。

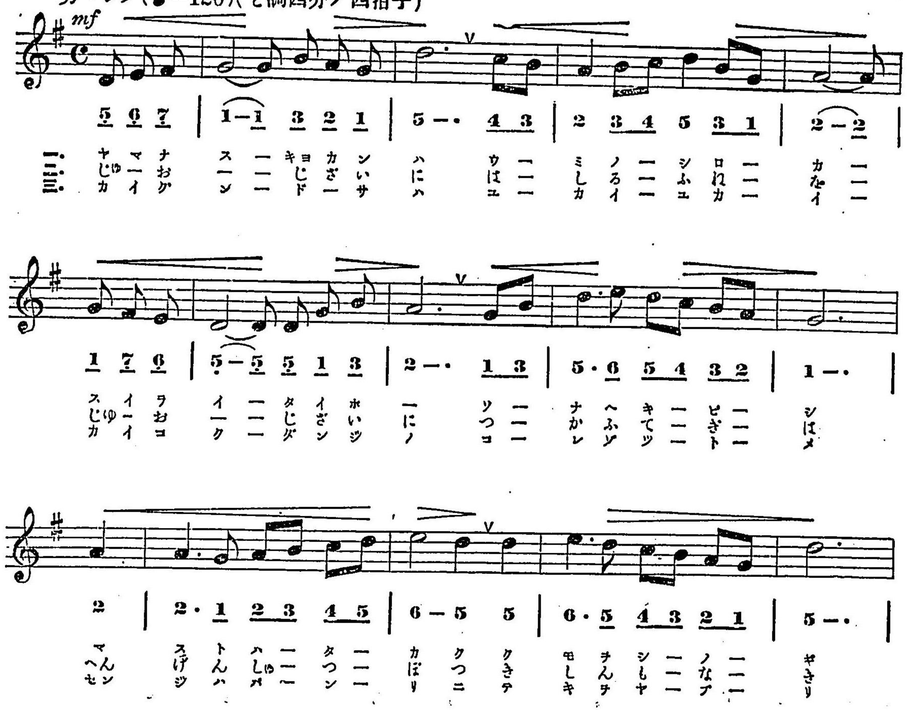
任務　ひきうけて行ふべきつとめ。

演奏注意　○前出「乳牛」若くは「我陸軍」を豫習すべし
○當曲はヘ調に移すも可なり

日本海軍

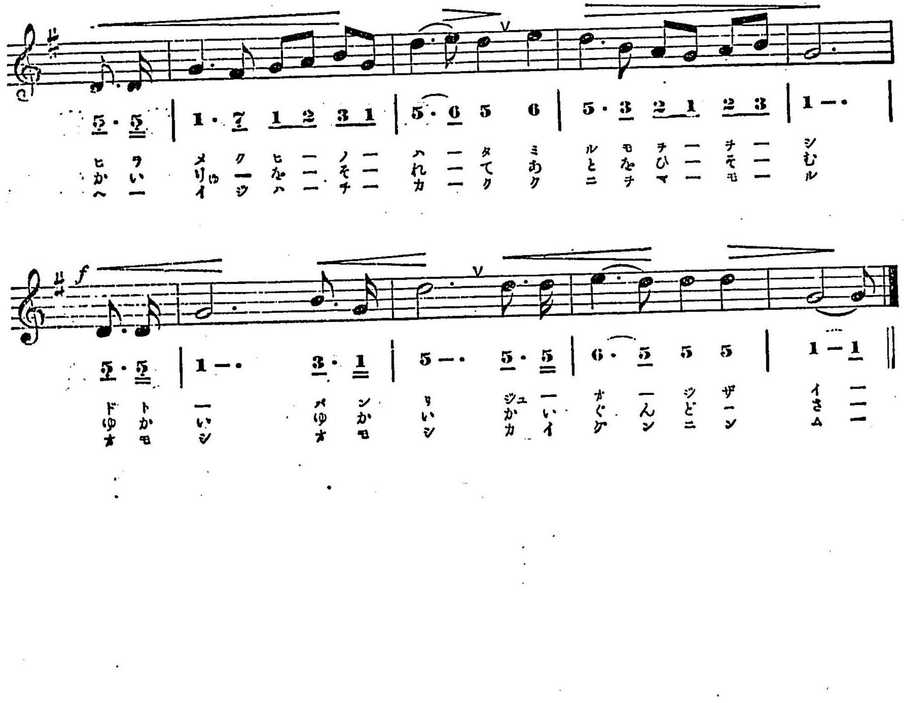
（三十四ページへつゞく）

勇マシク（♩=120）（ト調四分ノ四拍子）



日本海軍

（三十五ページのつゞき）



御眞影

(一)

現御神、大御神とあふぐなる、
雲のあなたに、まのあたり、
をろがむことの、うれしさよ。

(二)

天皇陛下
み太刀そばめ、み手うごかし、
みことのらすと、おもふまで、
かしこき御影、仰ぎつゝ、
をろがむけふの、かしこさよ。

(三)

皇后陛下
み手の扇子、み裳すそさへ、
いまやゆらぐと、見ゆるまで、
かしこきみかげ、あふぎつゝ、
をろがむけふの、たふとさよ。

目の前に見奉る神の如くに、九重の御所の奥に仰ぎ奉る兩陛下の御姿を、今こゝに拜み奉ることの何たるうれしいことよ。御太刀をば御腰の側におしよせ、御手をば動かしなされて、何かものおほせられるかと思はれるほど尊い天皇陛下の御寫眞ををがむといふは何たるおそれ多いことよ。御手の扇子や御めしものゝすそまでゆれ動くかしらんと思はれるほど尊い皇后陛下の御寫眞ををがむといふは、何と尊いことよ。

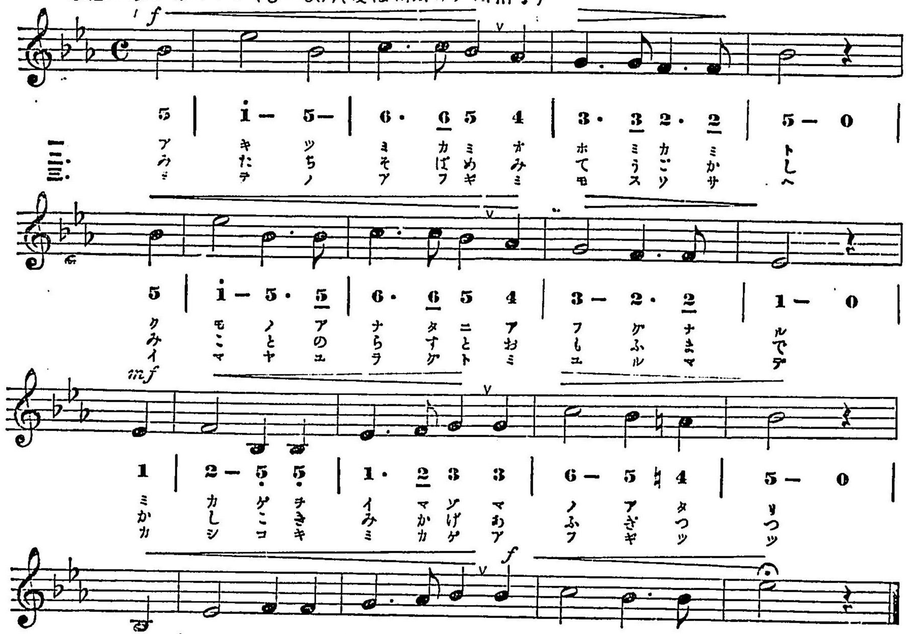
(略解)

演奏注意

重々しく歌ふべく且つ緩漫に流れざる樣注意すべし

御眞影

敬意ヲ以テ重々シク(♩=96)(子拍四ノ分四調ハ變)



名は萬代

(一)

虎は死して皮を留む、
　虎は百獸の王、
人を以て獸に若かざるべけむや、
　怠るな惰るな、
朽ちたる木は彫るべからず、
　はげめはげめ、
志は氣の帥なり、
　人は一代、
名は末代、
　芳を千歳にながせよ。

(二)

人は死して名を殘す、
　人は萬物の靈、
人となりて務に怠るべけんや、
　怠るな怠るな、

糞土の牆朽るべからず、
　はげめはげめ、
志は氣の帥なり、
　人は一代、
名は末代、
　名をば萬世に傳へよ。

朽ちたる木は彫るべからず。糞土の牆朽るべからず。之は孔子の語で、論語にあるが、さて其の意は、朽ちた木には、ほりものができず、くさった土の壁では屏などを塗ることができない。志のくさった者に教へても無益なのは、この如くであるといふこと。牆とは土屏の類。朽とは鏝で塗ること。

志は氣の帥なり　之は孟子の語である。氣とは元氣勇氣などの如き身體をはげまして起るものをいふ。志とは心の向く處である。志は氣の大將であるから、志がくさって居るときは勇氣も元氣も出るものでないといふこと。

人は一代、名は末代　人の身體は一代かぎりで、死すれば滅びてしまふものだけれども、世にてがらを殘せば、其人の名は千萬年の末の代までも傳はるものである。

芳を千歳にながせ　芳は芳名といふて、善い事をしたと人にほめられる評判。故に善い名を千年の後まで傳へること。

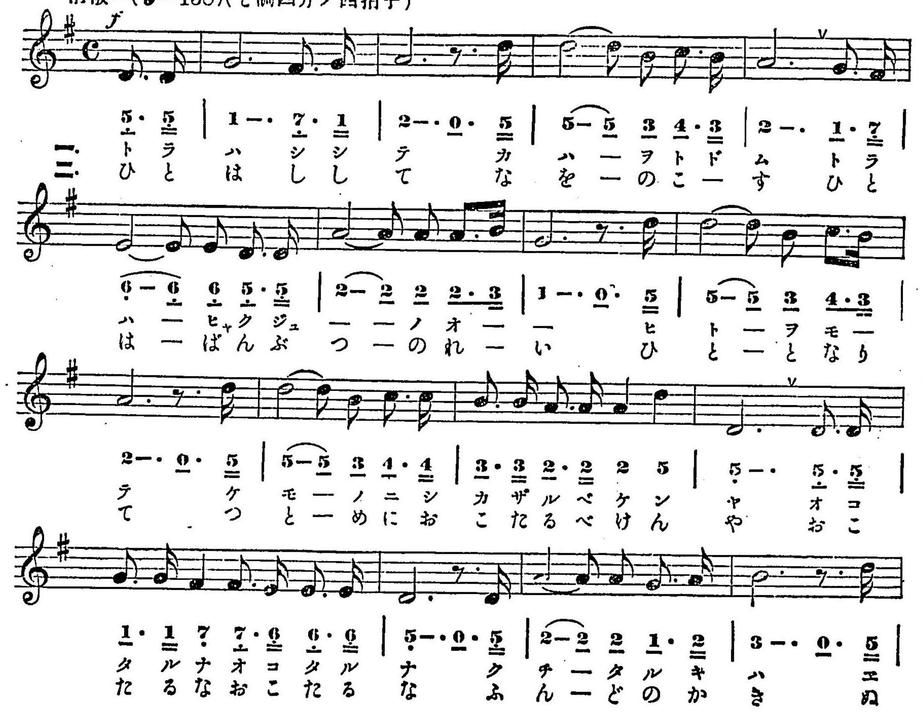
演奏注意

○豫習曲として「日本海軍」を復習すべし
○凡ての附點八分音符及十六分音符はスタッカトーに(短かく)、又凡ての附點二分音符は必ず其價値だけの音長を保つよう注意すべし
○最尾の二小節は其音符の價値、前と同じからず(長し)混ずべからず

名ハ萬代

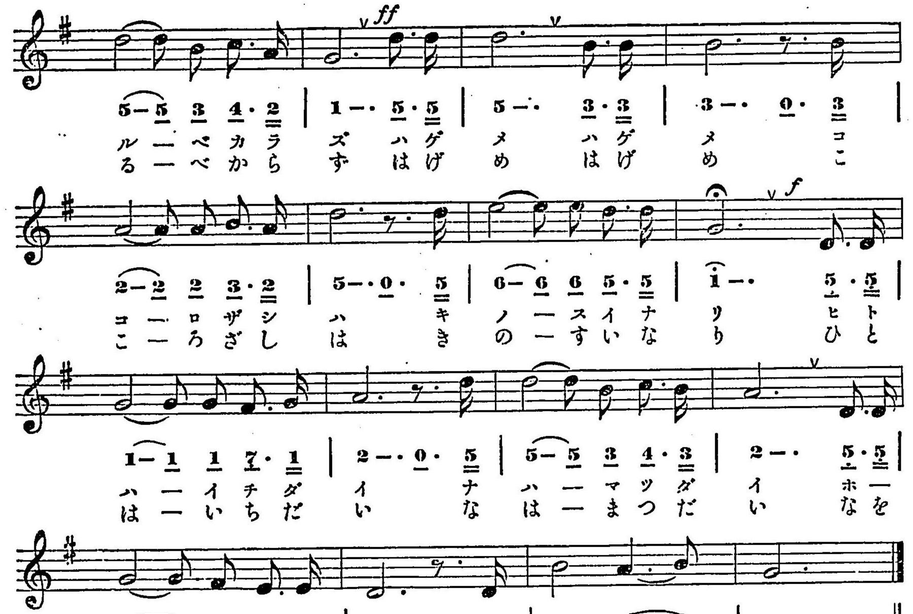
（四十ページへつゞく）

活潑ニ(♩=138)(ト調四分ノ四拍子)



名ハ萬代

（四十一ページのつゞき）



花鳥

(一)

柴のあみ戸の、
明ぼのに
なほ山陰は、
をぐらくて、
おぼろ月夜の、
影ながら、
霞にこもる、
花のいろ。

(二)

峯の横雲、
たちわかれ、
やゝ山ぎはも、
見えそめて、
匂へる花の、
いろながら、
霞をもるゝ、
鳥の聲。

(三)

やよひの野べの、
朝露に、
よそひこらして、
おのがじゝ、
いろかあらそふ、
桃、櫻、
花の姿ぞ、
うるはしき。

(四)

やよひの野邊の、
あさぼらけ、
ふしをきそひて、
とり〳〵に、
うたひかはせる、
百千鳥、
聲の匂ひぞ、
うつくしき。

柴ぐらゐであんだ戸をしめてある山家の夜あけがたに、山のかげはまだ暗く、花の色がなほおぼろ月の影にてらされたなりで、霞にこめられてある。

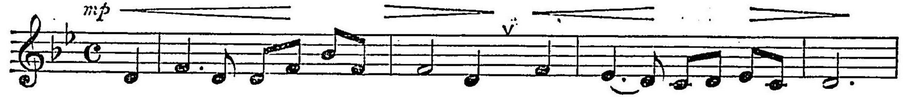
さて、しばらくすると、峯に横たはって居る雲が晴れわかれて、山のはしの方も、少々見えかゝりうつくしい花の色なりにとざしてゐる霞の中から、鳥の鳴き聲が洩れて聞える。

陰暦三月の頃は、野邊の桃や櫻が、めい〳〵思ひ思ひに、朝露で、立派なよそほひを十分にして、色や香をあらそうて居る。その花の姿は實にきれいである。

春の野邊の明けがたに、多くの鳥が思ひ〳〵におもしろう歌うて居る。その聲のふしは實にうつくしい。（右略解）

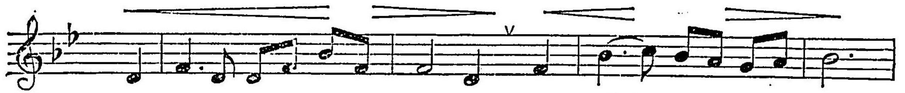
花鳥

優美＝(♩=88)(變ろ調四分ノ四拍子)



3 | 5・3 3 5 i 5 | 5 — 3 5 | 4・3 2 3 4 2 | 3 — ・ |

一・ シ バ ノ ア ー ミ ー ド ノ ア ケ ー ボ ー ノ ー ニ
二・ み れ の よ ー こ ー ぐ も た ち ー わ ー か ー れ
三・ ヤ ヨ ヒ ノ ー ノ ー ベ ノ ア サ ー ツ ー ュ ー ニ
四・ や よ ひ の ー の ー ベ の あ さ ー ぼ ー ら ー け

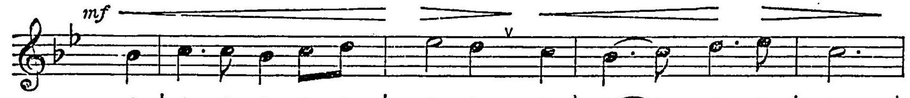


3 | 5・3 3 5 i 5 | 5 — 3 5 | i・2 i 7 6 7 | 1 — ・ |

ナ ホ ヤ マ ー カ ー ゲ ハ チ ク ー ラ ー ク ー テ
や や や ま ー ぎ ー は も み え ー そ ー め ー て
ヨ ソ ヒ コ ー ラ ー ジ テ ホ ノ ー ガ ー ジ ー シ
ふ し な き ー そ ー ひ て と り ー ど ー り ー に

(四十四ページへつゞく)

花鳥



i | 2・2 i 2 3 | 4 — 3 2 | i・2 3・i | 2 — ・ |

ホ ポ ロ ゾ キ ー ヨ ノ カ ゲ ー ナ ガ ラ
に ほ へ る は ー な の い ろ ー な が ら
イ ロ カ ア ラ ー ソ フ モ モ ー サ ク ラ
う た ひ か は ー せ る し も ー ち ど り

2 | 3・2 i 2 3 | 4 — 2 3 | 5・i 3 2 i 7 | i — ・ |

カ ス ミ ニ コ ー モ ル ハ ナ ー ノ ー イ ー ロ
か す み を も ー る る と リ ー の ー こ ー ふ
ハ ナ ノ ス ガ ー タ ゾ ウ ル ー ハ ー シ ー き
こ ゑ の に ほ ー ひ ぞ う つ ー く ー し ー き

(四十五ページのつゞき)

(女子用)

赤十字

(一)

いで〻戰ふ、ますらをの、
力となるは、何なるぞ、
きよき心を、其白旗に、
そめてかゞく、赤十字。

(二)

双の林、彈丸の雨、
くゞらずとても、國のため、
いくさのにはに、少女のいで〻、
盡すは是よ、赤十字。

(三)

血しほの流れ、骨の山、
こえきてなやむ、大丈夫を、
なぐさめみとる、やさしき其手、
盡せ誠の、赤十字。

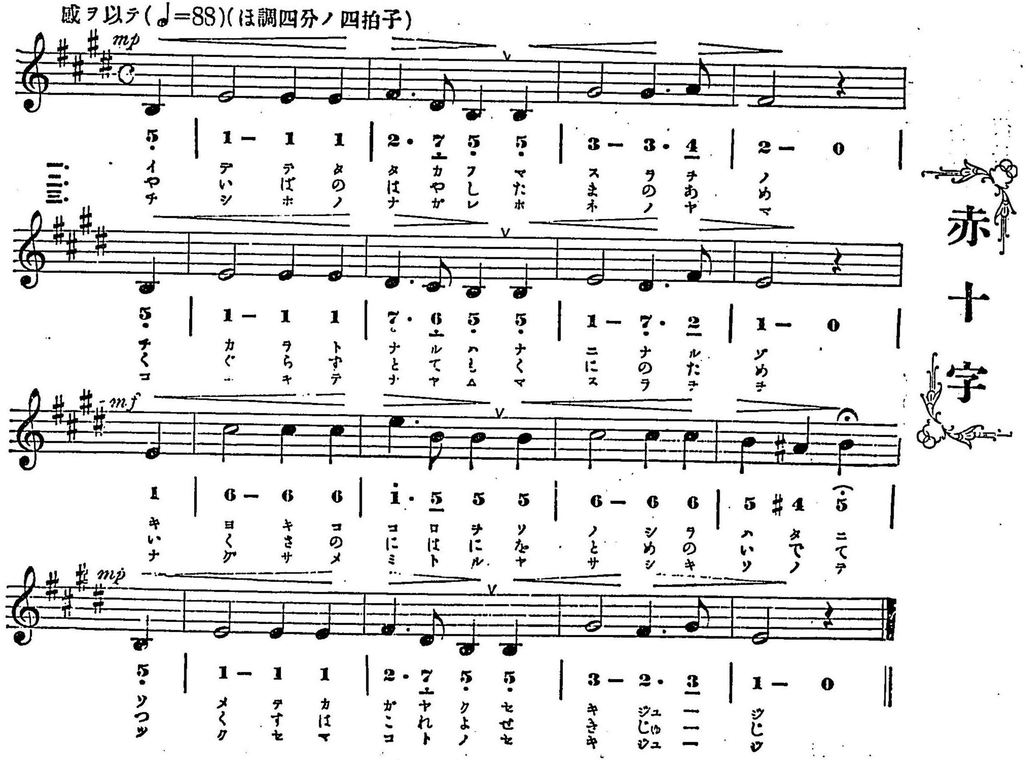
赤十字は、戰場に於て負傷者を懇にいたはり手あて介抱するもので、大に戰士の力になるものであるから、彈丸雨飛の間こそはくゞらね、女子が戰場で盡すこの上なき務であるといふこと。

きよき心を云々　戰士の力となるは何かといふに、即ちこの赤十字であるといふ意。

いくさのには　戰場。

みとる　看護する。

赤十字



亡き友

(一)

曉の　露、　ふみわけて、
さそひさそはれ、　學の　路に、
手をくみかはし、　いくとせか、
ちぎりし友よ、　今いづこ。

(二)

思へば哀れ、　相ともに、
いさめいましめ、　勵まして、
末たのもしく、　學の庭に、
ちぎりし友よ、　今いづこ。

(三)

ひとり寂しき、　ふみの窓、
いぬる夕は、　わがともの、
末のさかえを、　夢みるものを、
あゝいまいづこ、　草のかげ。

手をくみかはし手をとりあうて。
今いづこ今はどこに居るか。

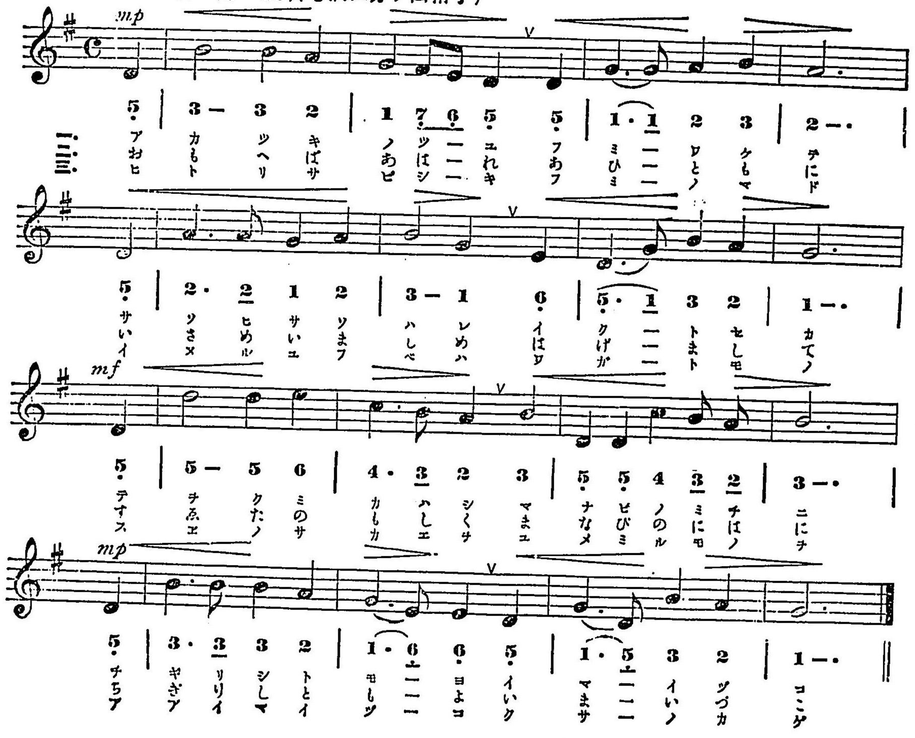
三の歌は、友に死なれて、我身一人が寂しい窓に對して本をよみ疲た時などは友の行くすゑの出世のさまなど夢に見たりするのに、あゝ其友は、其の實此世にあらぬ人となって、草葉のかげに隱れて居ることとなったか。さてはく〳〵といふ意。

演奏注意

○發想に注意し落着きて歌ふべし

○第三段第三小節の八分音符二個は稍延ばして急がず歌ふを要す

追想ノ感ヲ以テ(♩=88)(と調四分ノ四拍子)



亡き友

水鳥

(一)

こけのひげ、
あらふばかりに、
なみたてゝ、
およぎまはるか、
池の水鳥。

(二)

河骨の、
花と花とを、
眞帆かけし、
船とはしるか、
池の水鳥。

古の句に、「波苔の鬚を洗ふ」といふことがある。池の岸や岩などに苔の生へて居るさまはまるで鬚の樣であるが、その鬚を洗ふほどに波を立てゝおよぎまはることかな、池の水鳥は。河骨といふ水草の花と花との間を、十分に帆あげた船の如くにはしりまはることかな、池の水鳥は。(解釋)

演奏注意

○極めて滑かに又流暢に歌ふべし
○所載樂譜以外のふしを附すべからず
○曲首の小形音符は樂器のみにて彈じ、さて直ちに歌ひ始むべし

優美＝(♩=88)(殺ほ調四分ノ四拍子)

三

水鳥

0 2 3- | 4 3 6 7 | 3-· 3 | 7- i 7 | 6 4 4 i |
コケノーヒーゲ アラッーーーバカー
かうほーねーの はなとーーはなー

7 6 4- | 0 3 4- | 3 7- 3 | 3- 7- |
リーニ ナミーーータ テテ
とーを まほーーーか てけし

0 1 1- | 1 2 2 2 | 2- 2 4 | 4- 3 2 | 3-· 6 |
オヨーーギマハーールーーカイい
ふねーーとはしーーるーーかー

7-7 i | 7 6 4 3 | 4- 6 7 | 3- 6 7 | 3-· 0 ‖
ケーーノーーミヅーートーーリ
けーーのーーみづーーとーーり

明治三十五年五月一日印刷
明治三十五年五月五日發行
明治三十五年十一月一日訂正印刷
明治三十五年十一月五日訂正再版

定價金參拾錢

編者　東京市京橋區竹川町十三番地　共益商社樂器店

代表者兼發行者　東京市京橋區竹川町十三番地　白井銓造

印刷者　東京市京橋區築地三丁目十五番地　野村宗十郎

發行所　東京市京橋區竹川町十三番地　共益商社樂器店

印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京樂地活版製造所

著作權所有